# 巻頭言（2025年度）

益子　俊志[a]

2026年は，WBCやサッカーワールドカップ，アジア大会など，国内外で注目を集めるスポーツイベントが数多く開催される年となります．世界のトップレベルで活躍するアスリートたちが示す高度な競技力や，勝敗の先にある真摯な姿勢は，多くの人々に感動と勇気を与え，スポーツの持つ力を改めて実感させてくれます．とりわけ競技スポーツ分野においては，こうした国際大会が競技力の到達点を示すと同時に，次なる課題を浮き彫りにする重要な機会ともなっています．

スポーツには，「する」「みる」「ささえる」という三つの関わり方があり，それぞれが相互に影響し合うことで，その価値はより豊かなものとなります．競技スポーツの現場では，アスリートの努力の背後に，指導者やコーチ，トレーナー，医・科学スタッフ，さらには大会運営や組織運営に携わる多くの関係者の支えがあります．また，スタジアムや映像を通じて応援する「みる」立場の人々の存在が，競技の魅力や社会的意義をさらに高めています．これら多様な立場が一体となることで，競技スポーツは単なる勝敗を超え，社会に根づいた文化として発展していくのだと考えます．

本学スポーツ科学部は，今年で創設10周年という節目の年を迎えます．この10年間で，スポーツを取り巻く環境は大きく変化し，科学技術の発展のスピードも一層加速しています．競技スポーツ分野においても，データ解析や測定技術，トレーニング理論，医・科学的サポートなどは日々進化しており，従来の知見だけでは対応しきれない課題も増えつつあります．

競技スポーツ分野を中心とするスポーツ科学は，競技力向上やパフォーマンス発揮に関わる研究にとどまらず，コンディショニング，傷害予防，リカバリー，指導法，チームマネジメントなど，極めて幅広い領域を対象としています．しかし，研究によって得られた結果と実践現場のすべてが，常に噛み合うとは限りません．そこにこそスポーツの難しさがあり，同時に，だからこそ探求し続けたくなる魅力があるのだと感じます．研究と実践の間に生じるギャップに真摯に向き合い，新たな視点や方法を模索し続ける姿勢が，次の発展につながると考えます．

今後も，本学スポーツ科学部では，科学の進展を的確に捉えながら，既存の枠組みにとらわれることなく，新しい研究分野や学際的な連携を模索し続けていきたいと考えています．研究と実践の往還を重ねる中で得られた知見を，競技スポーツの現場へと還元し，次世代の競技力向上と人材育成に貢献することが，本学部の重要な使命です．

本誌には，こうした問題意識のもとで取り組まれた，競技スポーツ分野を含む多様な領域からの研究成果が掲載されています．それぞれの論文が新たな気づきや議論を生み，研究と実践を結びつける契機となるとともに，スポーツの未来を考える一助となることを期待しています．

最後に，本誌の発行にあたり，ご尽力いただきましたすべての皆様に，心より感謝申し上げます．

[a] スポーツ科学部長・教授